

3千政ス第 号

千葉市長 神谷 俊一 様

千葉市新基本計画審議会
会 長 轟 朝 幸

スマートシティ推進ビジョンについて（答申案）

令和2年12月23日付2千政ス第14号により諮問のあった標記の件について、次のとおり答申します。

I 答申にあたって

千葉市は、98万市民が暮らす政令指定都市として発展を続けていますが、将来に目を向けると、少子高齢化による生産年齢人口の減少や、地球温暖化に伴う気候変動、ポストコロナ社会への対応等、重要な社会変化の到来が見込まれています。

これらの社会変化に対応するため、行政のみならず、あらゆる市民が協力し、知恵を出し合いながら持続可能なまちづくりを進めていくことが求められる中、近年、加速度的に進展しているAIやIoTを始めとするテクノロジーと千葉市がこれまで培ってきたICT活用のノウハウやコミュニティを最大限に活用し、市域全体の生活の質の向上を図り、地域とともに持続可能なまちづくりを進めるため、「(仮称)スマートシティ推進ビジョン」(以下、「推進ビジョン」という。)を策定することとしています。

推進ビジョンでは、千葉市のこれまでのICTを活用した取り組みや今後直面することが見込まれる重要な社会変化などの千葉市の状況と、加速度的に進展するテクノロジーや国の動向等の社会経済情勢を踏まえて、千葉市の目指すべきスマートシティの姿や実現に向けた取り組みの方向性、推進するための仕組みが示されています。

この推進ビジョンについて、「持続可能な地域社会と良質な市民生活の創出」に向けたスマートシティ推進の観点から、テクノロジーの状況・国の動向・本市の特性等を踏まえた取り組みの方向性を検討することを目的に、昨年12月23日の市長からの諮問を受け、有識者や各関係団体からの代表者及び市民等で構成される当審議会は、推進ビジョンに関する審議を行うべく、新たにスマートシティ部会を設置しました。

スマートシティ部会では、延べ4回にわたり、推進ビジョンや指標案の内容等について、集中的かつ幅広い議論を重ね、この度、本答申の提出に至りました。

本答申をもとに、推進ビジョンの内容が一層充実し、あらゆる市民がまちづくりに参画する契機となり、目指すべき姿の実現に向け、地域とともにスマートシティのまちづくりが推進されることを期待します。

II 審議の方法

千葉市新基本計画審議会スマートシティ部会は、令和4年3月に千葉市が策定予定の「(仮称)千葉市スマートシティ推進ビジョン」(以下、「推進ビジョン」という。)について、市より諮問を受け、審議を行ってきました。

審議の進め方として、諮問理由が「持続可能な地域社会と良質な市民生活の創出に向けたスマートシティ推進の観点から、テクノロジーの状況・国の動向・本市の特性等を踏まえた取組みの方向性を検討する必要があること」であること、また、令和3年第1回の審議において、市から、推進ビジョンの実現に向けて、地域ニーズや課題、対応策等を市民や事業者等と共有するための「取組項目の見える化」及びスマートシティの推進状況を把握・共有するための手段である「指標の設定」を推進ビジョンとは別に整理する旨の提案があり、部会として了承したことを踏まえ、スマートシティ部会の審議の論点を以下のとおり定めました。

- 推進ビジョン原案の策定趣旨、基本的な考え方、取組みの方向性、推進体制・推進手法、ロードマップの記載内容を確認し、これらがより良いものとなるよう考え方や方策等を提示すること

このため、推進ビジョンの審議においては、スマートシティ全般に関する専門的立場からの示唆等も行いつつ、これらを中心に審議を行ったところです。

【スマートシティ部会の開催状況】

第1回 令和2年12月23日

諮問、副部会長の選任、推進ビジョン骨子案の審議

第2回 令和3年5月31日

推進ビジョン原案(前半)の記載内容、取組項目・指標案の取扱いの審議

第3回 令和3年6月21日

推進ビジョン原案(後半)・指標案の記載内容の審議

第4回 令和3年7月20日

推進ビジョン原案(意見反映版)・答申(案)の審議

Ⅲ 審議の結果

今般の推進ビジョン原案については、千葉市の目指すスマートシティの姿や実現のための原則等の基本的な考え方を始め、取組みの方向性、推進するための仕組みとなる推進体制や推進手法など、スマートシティを推進していくために必要と考えられる事項については、概ね盛り込まれていることを確認しました。

スマートシティ部会の審議においては、推進ビジョンが果たすべき役割の整理を行い、本ビジョンは目指すべき姿や取組みの方向性、推進するための仕組みづくりを示すものであることから、実現に向けた具体的な取組内容は別資料として作成することとしました。また、スマートシティの推進状況を把握・共有するための手段として指標を設定し、かつ、指標もビジョン内には設けず、別資料として作成することとしました。

その上で、推進ビジョン原案を俯瞰しながら、各項目の内容について、市民の共感を呼び、自らの役割を認識しながら、行政とともにまちづくりを進めていくために必要な観点や表現等について議論を重ねた結果、下記のとおり意見を付すとともに、推進ビジョン原案に意見を反映させ、別添のとおり「(仮称)スマートシティ推進ビジョン原案(意見反映版)」を取りまとめるに至りました。

【部会意見】 ※正式版では、委員名の記載は行いません。

1 表紙

○副題に「地域とともに」との文言を用いているが、市民中心ということを前面に出した方が良い。 (南雲委員)

○・・・・・・・・

○・・・・・・・・

2 策定趣旨

○千葉市は今までもテクノロジー活用を先導していることを主張し、時代の変化を踏まえてもっと成長していくことや、他自治体を先導していくようなメッセージを伝えられると良い。 (森川委員)

○より千葉市らしさを打ち出したり、スマートシティに取り組む必要性やメリットを強調したりするなど、市民のエモーションに響くような内容が望ましい。(越塚委員)

○地域・市民・企業の主体性や関わり方がより見えるようになると、スマートシティのイメージを持ちやすくなり、自分事として受け止めやすくなる。(沼尾委員)

○策定趣旨に必要な要素は網羅されているが、千葉市らしさが薄く、日本全体の白書を読んでいるように感じられるので、より市民の共感を得るためには、千葉市ならではの感があると良い。(南雲委員)

○千葉市の強み・弱みを分析した上で、強みをどう伸ばして弱みをどう補うのかを表現できると内容に厚みが増す。
(南雲委員)

○.....

○.....

3-1 基本的な考え方(千葉市が目指すスマートシティ)

○キャッチフレーズのように端的に表現できると良い。

(森川委員・越塚委員・南雲委員・高梨委員)

○テクノロジーは実現するための手段であることから、言葉として使うことは好ましくなく、市民が意識することなくテクノロジーが自然と活用されているような表現とすること、また、市民が主役であるとの想いを込めて、住民が作り上げていくまちであると読み取れる表現とすることが望ましい。
(森川委員)

○3行で目指す姿を表現しているが、想いを込めて1行で表現した上で、5行程度で補足するほうが、市民に訴求する。
(越塚委員)

○多様な人が個々のあり方のまま、自分の幸せを追求できるという表現として、「最大多様性の最大幸福」という言葉が使われる。データ社会という表現は、市民に冷たく受け止められる印象があり、市民の心に響かせるためにも、潤いや思いやりの要素を入れることが望ましい。
(南雲委員・高梨委員)

○機能をフォーカスしているように見えるため、何がしたいのか?どこに行きたいのか?を明確にして、どんなまちを目指すのかを表現できると良い。
(沼尾委員)

○最適という表現は、解が1つであるような印象を受けるが、テクノロジーによって多様な選択が可能になり、一人ひとりが自己実現できるといった豊かさを打ち出せると良い。
(沼尾委員)

○.....

○.....

3-2 基本的な考え方(スマートシティ実現のための原則と重視する視点)

○脱炭素化の要素として、自然環境との共存に関する理念を含めるべき。

(南雲委員)

○「多様な主体との連携」の視点は、行政が主語になるのか。それによって言葉の使い方が変わるので検討が必要。
(沼尾委員)

○千葉市を良くしたいと熱く思っている方々が、点・線・面に活動しながらまちづくりができるようなことを期待したい。
(高梨委員)

○.....

○.....

4 取組みの方向性～5つのスマート～

- 取組みの方向性を表したサークル状の図の中心には、キャッチフレーズを記載してはどうか。他自治体では、「あったかいDX」や「共生未来都市」、「やさしいまち」等のキャッチフレーズを掲げており、みんながつくっていく、あたたかい、やさしいなど、すべての市民に関係がありそうな形容詞があると良い。 (森川委員)
- 取組みの方向性を表したサークル状の図の一番外周に記載されている内容は、何故その取組みを記載しているのか、データの裏付けがあることが望ましい。また、図の中心には、「市民」と記載し、市民を中心として、その周りにどのようなことがスマートになっているのかを表現できると良い。また、スマートという言葉は様々な解釈ができるため、検討する際は使わないほうが良い。また、検討する際はユーザー側の価値が重要。 (南雲委員)
- このようなビジョンを作成する際は、上から作って下に行って、再度上に戻ってみるということが重要。 (南雲委員)
- 具体的な記載が薄く、不明瞭である。 (越塚委員)
- 取組例で示されている内容の中に、他自治体で多く見受けられるような取組みが含まれていない印象を受ける。また、5つのスマートに分類して取組みが例示されているが、その分類に整理することの妥当性について、改めて検討されたい。(越塚委員)
- 暮らしがスマート！の目指す姿は、福祉や介護等の取組みを記載したほうが、市民の関心が強いだろう。 (越塚委員)
- 産業に関する内容があまり含まれていないように感じるが、産業活性化により税収が増えて正のスパイラルになる。 (森川委員)
- 千葉市の2つの特徴として、1つ目は雇用に対するニーズを満たせていないこと、2つ目は、もう一つは、居住空間が県内であまり高くないことが挙げられるが、新型コロナウイルス感染拡大に伴う都心からの移住先として、雇用と人口が増えていくチャンスになるので、キャプチャーする方向にベクトルを持っていけると良い。 (越塚委員・南雲委員)
- 市役所がスマート！には、オープンデータの取組みも含まれるのではないかと。また、電子申請やプッシュ型だけでなく、情報プラットフォームのような、市民参加のための仕組みが整備されていくというメッセージをここで出すという考え方もあるのではないかと。 (南雲委員・沼尾委員)
- サービスをより使い勝手の良いものにしていく観点では整理されてきているが、情報をどうシェアするのかというような要素は抜けているため、意思決定プロセスにおける情報開示や市民参画の視点を入れることは大切である。 (沼尾委員)
- 共助のデジタル化が今後非常に重要になると考えているため、共助の取組みに関する記載も必要。 (南雲委員)
- ・・・・・・・・
- ・・・・・・・・

5 推進体制・推進手法

○千葉市は人口が多いことから、スモールスタートを強調したことは知恵を感じられて良いと思う一方で、環境・医療・行政手続など、市がイニシアティブをとらないといけない領域がある。
(南雲委員)

○現場からボトムアップで取り組んでいくことは大事であるが、脱炭素化のように、市全体の方向性や考え方に基づく取組みや、共助を含めた民間と連携するためのプラットフォーム形成やオープンデータの取組みなど、スマート化を支えていくためのベースとなるオール千葉市の基本的な対応について、これからどうしていくのかというところが求められる。
(沼尾委員)

○スマートシティの進め方は、大きく2通りある。

アドバルーン型は市民も着目するので、プロモーションは上手くいくが、デプロイしようとする大変になる。一方でスモールスタートはデプロイしやすいが、市民への周知や合意形成が大変なので、工夫が必要。
(越塚委員)

○メディアや有識者に市の取組みを取り上げてもらうことで、職員のシビックプライドに繋がることがあるので、推進手法として有効である。
(南雲委員)

○.....

○.....

6 ロードマップ

○ロードマップの対象にテクノロジー感が強い印象を受けるため、テクノロジー感を低減させるような表現が望ましい。
(森川委員)

○合意形成プロセスにおけるデータやテクノロジー活用と、サービスにおけるテクノロジー活用とは性質が異なる。現状のロードマップはサービスに絞り込んでいるが、データは対話が生まれる起点になったり、アイデアや認識を繋ぎ合わせたりするための重要なツールなので、その視点を取り入れると良い。
(沼尾委員)

○20年後のイメージとしてSociety5.0の記載をしているが、その頃には利用されていない表現であると思料されるため、検討が必要。
(南雲委員)

○最終的には、環境を含めてどのようにウェルビーイングを実現するのかというところを表現できると、市民が安心するだろう。
(南雲委員)

○.....

○.....

IV 結びにかえて

新基本計画審議会スマートシティ部会は、市から示された推進ビジョン原案の記載内容について、私たちの日々の活動の中での意見や国内外の取組事例、市民目線の観点から、限られた時間の中で可能な限りの審議を行ってきたところであり、市においては、本答申に示すところのスマートシティ部会の意見や推進ビジョン（意見反映版）の内容をしっかりと受け止め、自らのものとする中で、活かすべき部分、さらに発展させるべき部分、改めるべき部分を明確化し、より一層市民の共感を得て、実行に繋がる推進ビジョンを策定してもらいたいと考えているところです。

少子高齢化や地球温暖化に伴う気候変動等の社会課題に加え、新型コロナウイルスの感染拡大という、これまで経験したことのない危機に直面している今だからこそ、行政のみならず、市民をはじめ多様な主体が一丸となってこれらの課題等に立ち向かい、ともにまちづくりを行うことが求められます。そのために、加率的に進展し続けるテクノロジーの活用は有効ですが、テクノロジーは手段に過ぎないことを常に念頭に置き、取り組むことが重要です。

なお、千葉市は全国をリードする形でICT活用を推進しており、これまで培った知見やコミュニティを活用できる強みがあり、市民をはじめ多様な主体と一体となって取り組むための素地はできているものと考えます。

本推進ビジョンが多くの市民等の心に響き、目指す姿を共有する中で、実際の行動につながり、千葉市にしかできない、「みんなでつくる快・適なまち」が実現されることを強く願い、本答申の結びに替えます。